

九月 シベリア連行、抑留生活、バ

ム、チタ、コムソモリスクで労働
昭和二十四年十二月 栄豊丸で舞鶴へ帰還 故郷へ帰
る

(新潟県 中村 甲)

シベリア抑留記

富山県 山出 秀三

昭和二十年八月十五日、天皇の命により終戦、本隊に結集した。続々飛行場へ周辺部隊が集結してきた。

内蒙古の部隊は戦闘しながら退却して悲惨な状態だったと、後退した状況を聞かされた。

飛行場の格納庫に八七戦闘機数十機、兵器弾薬が山のように集積されてソ連軍に没収・武装解除され、捕虜の身となった。飛行場は高圧線が張り巡らされ、鉄道引込線の施設が整備されていた。数方の部隊の集結である。戦争が終わって内地への帰還が取り沙汰され

ているが、一カ月たっても帰還の船がないとのことで不安な日々を過ごした。その間、我々はソ連軍の捕虜の身、心配でいろいろなデマが飛ぶようになった。

部隊は混成部隊に編成されて、いろいろな兵科の千人単位の部隊となり、帰国の命令を待った。部隊長は航空少佐、中隊長、小隊長も航空操縦士の将校で部隊編成されて、十八人の分隊長の指揮を命ぜられた。

日が経つにつれ、集結されていた部隊の移動が始まった。引込線に有蓋貨物車が続々と入るようになり、どこへ行くのか部隊が移動して行くようになり、我らの部隊も一貨物車二段の棚に五十人ずつ詰め込まれて、千人一列車で発車した。九月の下旬、もう満州は朝夕寒い季節である。ソ連軍の指揮下に入ってから食糧も不規則な配給となり、ソ連兵の程度の悪いのにはほとほとこずった。列車も所々で停車し、鈍行列車の輸送である。

十月に入って阜新駅で下車させられた。どこの港から乗船するのか言わないが、船がなくてここでしばらく使役をと、部隊長からソ連軍の命令だとの伝達であ

る。宿舍は満鉄の官舎で全部空き家で、敗戦のため逃げた。ずさんな有様で分隊で何とか泊まるようにしたが、食事を作るには炊事の場所もなく、食糧の配給も家畜の餌のような穀類の支給。外で煉瓦を積んで石油缶で煮炊きをする。今迄考えてもみなかった環境に変わった。

阜新市は露天掘りの石炭の産地で発電所のある所で、ソ連軍はこの火力発電所の施設のタービン解体して、ソ連国へ貨車輸送積込み作業。経験のない重労働、十月いっぱい労働させられた。タービンは日本製の日立・東芝・富士の大きなタービンを解体、貨車積み。ソ連はどさくさ紛れに大胆な事をするものだと言った。

阜新の露天掘りの炭坑では、日本では見られない素晴らしい真っ黒な石炭がすり鉢式の壁の層になって掘り出されている。夜間になると一部自然発火している所がちょうど日本の田圃の夜の畦草を燃やす風景みたいで、驚きと故郷の秋の風景が偲ばれる。

十一月初旬、解体作業は終わり、また有蓋貨物車に

乗せられ阜新をあとに満州鉄道で奉天、今の瀋陽方向へ輸送される。鉄道沿線は日本軍の敗戦を罵るように満人の態度が変わっていた。日本兵に唾を吐く有様も見られ、戦争に負けると何と惨めな有様にと変わった。

奉天に着くと、北満からどんどん引揚列車が、婦女子はデッキにぶら下がりがながら詰め込まれて輸送されてくる。その有様は敗戦の悲惨な姿で情けなく、今後どうなるのか心配と不安で心の動揺を感じる。ソ連兵はマンドリン銃を肩に掛けて警戒している。我々の輸送列車は、引揚列車と全然反対方向、北へ北へと進む。これでは日本への帰国ではない。

貨車の中は動揺と不安と推測でいろいろなデマが飛びようになり、心の動揺を皆で慰め合うのが精いっぱい。どこへ連れられて行くのか行く先は知らされない。不安な輸送列車に乗せられ、北へ北へと鈍行列車は進む。寒い寒い零下の十一月の北満の地を、冷凍車のように中は白い氷の花が咲いた貨車に詰め込まれて、夜昼なしに列車は進む。

ハルビン駅に到着したようだ。進行中に逃亡者が出たことで警戒が物凄く厳重になった。部隊命令で逃亡者は即刻銃殺することであるから行動は一緒にするように伝達された。小隊長の話では一貨車逃亡者が出たとの話である。三人捕まって、停車中に皆の前で銃殺すること。ハルビン駅にはソ連のマークの貨車が随分到着していた。それに乗り換えることで移動でこったがえしていた。一列車二十五両編成で、随分長い列車である。ここまで来る輸送中に、逃亡者は夜の進行中に窓から飛び降りて逃亡したとのことである。逃亡者は十八歳から十九歳ぐらいの少年航空志願兵とのことである。ハルビン駅で逃亡者三人が、我々の目の前であのマンドリン銃で射殺された。誰であったか知る由もない。

我々はそのままソ連の貨車に乗り換えてハルビン駅を発車した。チチハル、満洲里を通りソ連領に入る。鈍行列車で、駅でない所で時々止まるので随分長い貨車の中での輸送である。途中、携帯していたカンパン、生米を少しづつ口にする程度でソ連軍から食糧の

支給はなく、水だけは所々の駅で給水の指示で車両毎に使役が出て、列を作って飯盒で水道の蛇口から汲むので人変に時間がかかる。機関車にも給水作業している。

シベリアは十一月末に入り零下二〇度三〇度、貨車の中も零下。人間の体温で温度が保たれている。逃亡者が出た為に貨車の戸は外から鍵がかけられ、少しの戸の隙間から外が見られる程度で、貨車の中は暗い寒い地獄の輸送。用便は貨車の床を少し破って足す有様。不衛生で高熱者が出る最悪の状態、そのうえ風が全員に発生している状態で、輸送中に死亡者が出て停車中に外に捨てる。悲惨な情けない状況である。

シベリア鉄道はバイカル湖付近まで来たのか、湖が戸の隙間から見られるようになった。馬糞や自動車がい水の上を通行している。日時も不明、どこへ連れられて行くのか全員不安の暗い貨車の中である。

列車から降ろされたのは、小隊長の持つ地図ではシベリア鉄道バイカル湖付近のウランウデ駅から分かれて南下しているらしいとのこと、ソ連国境と外蒙古

国境スフバートルであった。もう十二月に入り、シベリアの寒気は満州の寒気とは全然違ひ、身にしみる寒さである。

忘れもしないが、貨車下ろしの使役に割り当てが有り分隊から二人出す。要領の良い上等兵が牛の冷凍の片足を持ち出して来たのには、分隊で何よりの命懸ぎになった。約一月余り食糧も支給されない非情な輸送で、全員体力が減退してへとへとになっている有様である。

ここからどこへ行くのか、身の回りの物を背負いながら行軍させられた。夜昼なしの寒い零下のシベリア大地の落葉松林の中の行軍で、ソ連兵にマンドリン銃でダバイダバイと追い立てられての行軍で情けない有様である。時々ロシア人が松林から出て来て追剥ぎに來るので二重の苦しみである。夜行軍で疲れて眠る者が出るので、凍傷になるからと皆で励ましながらの苦しい行軍が続いた。

落葉松林の少なくなる所に国境のガードが設置されて、ソ連国からモンゴル国へ入る。ソ連軍からモンゴ

ル軍に捕虜の引き渡しが始まる。モンゴル軍の軍装はソ連軍とは違ひ。員数を数えるのはソ連軍よりも悪いので、寒い所に立たされるのには閉口する。

モンゴル国アルタンブラグまで行軍、ここから軍用自動車に乗る。幌で覆った自動車で走るので、物凄く寒気が身にしみる。モンゴル草原の原野を走る走る、何百キロ走ったか、向こうに微かに白い建物が見えて来た。全然思ひもよらない国へ連れられて来た。何をさせられて殺されるのか不安が募る。まあ皆が一緒だからと覚悟はしている。果てしない草原で自動車から降りた。

零下四〇度、木枯らしが体にしみる。体感温度は六〇度ぐらいだろう。降ろされた所には地下洞穴が点々と数カ所見られる。この洞穴が宿舎らしい。中隊毎に洞穴に入る。中は通路幅三メートル長さ八〇メートル程度で、両側に一メートル程の高さの棚が八段あり、垂直の梯子が片側に四個取り付けてある。野菜の貯蔵庫に使用していた所とのこと。明かりは一〇ワット程度の暗い電球が四個程あり、手さぐりの室内である。

洞穴の入口は三メートルで、穴の縁はちょうど雪の「かまくら」のように氷が穴のまわりを包んでいる。

洞穴と外気との差があつてできるのだ。

どさくさの中から炊事の支度になるが、まず水の準備が一番。草原原野で水がなく、四キロ離れた所に行かがあるので取りに行く。各中隊より数百人の割当てで、寝具の毛布を首に巻き、モンゴル兵監視の引率で敗残兵のみすぼらしい姿で水でなく氷を取りに行く。

何とも情けない光景である。かつての日本軍の姿ではない。河の氷を砕くにはちょっと骨が折れる。氷を毛布にくるみ、背負つて宿舎の洞穴の地獄風呂釜に入れる。氷を水に溶かして使用するには随分氷が必要だ。

夜明けになると氷を取りに行くのが部隊の日課だ。氷を水に、水をお湯に、そして家畜の飼料コウリヤンを人間が口にするのにどれだけの時間がかかるか。一日に一回が精いっぱい。それを皆が何よりも首を長くして待つ。口に入れる食物がないと何と哀れなものか。腹はぐうぐうと鳴るがどうにもならない。皆静かに暗い穴の中で待つだけだ。室内も零下で、人と人が交互

に体をすり合わせて暖を取る。まったく地獄の監獄だ。

室内は薄暗い。手探りの何とも言えない淋しい環境の日々が続く。外は零下四〇度くらいあるだろう。十二月は昼のないもぐらの穴蔵の中で、夜中三時頃に一日一回出来上がる中国のコウリヤンのまだ炊きあがっていない雑炊の配給で、静かな薄暗い穴蔵がとたんにざわざわしてくる。飯盒の目盛りで厳しく分配するのだ。胃袋の中に何も入ってないと餓鬼の境遇になり、普通常識では考えられない、何と表現していいか、この境遇になつた者でないと判らない餓鬼の社会だ。

氷取りが十二月の日課、外は零下四〇度の木枯らしの風が吹く。室内も零下で、環境衛生は最悪の状態。体力は栄養失調で発熱者は続出、軍医がいても薬も充分になく、死亡者が多く出たのはこの時期だった。死骸は一カ所に集めてあるが、冷凍になつて人間としての扱ひではなかつた。

自分もいつどのようになるか分からない。淋しい思いで一日一日、皆と暗い洞穴で体をすり合つて日々を

過ごした。

十二月末移動が始まる。モンゴル首都ウランバートル郊外アマグロン収容所に收容された。ここは穴蔵でなくて鉄条網が張りめぐらされ、高い所から見張り監視所のある土かぶりの収容所で、穴蔵収容所より少しは環境が良くなった。見張台には絶えずモンゴル兵が足元までひきずった毛皮のシューバから顔だけ出して、マンドリン銃をかかえ昼夜監視を続けている。便所は深い穴に板を二枚渡した丸見えの所で尻を出して用便をする。小便大便はすぐに凍る。消化が悪いので赤いコウリヤンは消化されなくて、出たものがそのまま高く氷の山が出来る。氷運びがなくなり、水は馬車に大きい樽桶を乗せた水槽で配給されてくる。樽の縁に氷が張りついていて如何にも寒さを感じさせる。

アマグロン収容所で昭和二十一年の正月を迎えた。正月と言っても何も無い。朝の人員点呼に整列して、祖国日本の方向に向かって遙拝して現在の健康を天に向かって祈りを捧げる。

モンゴル首都ウランバートルは当時人口六万とか

言っていた。現在は六十万いるそうだ。一月は一日一回のラクダの胃袋の細切れの入ったシャブシャブのコウリヤン雑炊で命を繋ぐ。ソ連に抑留されてから風呂は一度も入っていない。全員に虱がたかって不衛生で、発熱・栄養失調と死亡者が続出、我が分隊からも一人秋田生まれの初年兵が死亡した。本当に可愛そうな情けない死亡で、死骸安置所に運んだ。収容所の外は木枯らしの吹く零下、樹木一本もない石ころと枯れ草の延々と果てしない草原で、正月いっぱい一日一回のシャブシャブ雑炊を心待ちに静かに希望のない日々を過ごした。

二月に入って作業が割り当てられ、ウランバートル市内で土掘りの作業が小隊毎にノルマが出され、毎日六時起床点呼、黒パン一個持参、モンゴル兵の監視引率のもと作業に駆り出される。作業は建築の基礎の穴掘り。鉄棒二メートル長さのポールで土を掘るが、土は鉄板のように凍っていてポールは跳ね返ってくるだけ。

全然ノルマは出ないが現場で立たされて、零下の街

頭現場で作業終了時間まで、誰も声も出さずにションボリと元氣のない姿で日暮れの来るのを待つ、なんと情けないことか。俺は今ままでどこでどんな罪悪をしてこんな仕打ちを負わねばならないのかと、戦争というものの罪悪を実感として体験させられている。

抑留体験二年半、まだまだ現場が変わるが、ウランバートルで劇場、大学、領事館、学校と、現在建築されている建築物は日本人抑留者の苦勞の積み重ねである。

日本人抑留者がウランバートルへ一万三千人抑留された。うち死亡者千六百人の犠牲のあることを知って頂きたい。モンゴル、ウランバートルからの全員引揚げは、二十二年十一月末函館港へ引き揚げ完了している。

抑留の日々は苦^{にが}し、また嘆かわしい

石川県 中田 繁

シベリアに連れられてきて以来、食物不足に悩む収容所内は飢餓地獄だった。保身のためとはいえ、命を延べんがための食物盗人と変わり、またその罪悪感も覚えず、戦争に敗れた惨めさには心も荒んだ。ソ連兵も心が荒み、憎悪を剥き出しにして、獣畜も同様の様相あらわに、自分が本位と零落し、それが人情をもなくさせる悲運と巡りて、さらに個人主義へと走らせた。戦争の歪みは、心を結ぶ人と人との信頼を失わせたのである。

私がソ連軍将校の官舎当番兵につかされたとき、大きな驚きを経験した。主義主張は当然自由にしたが、職権の重さを知らされた。それをこの目で見せつけられた。私には大変な驚きであった。日本兵の管理権の行使は収容所所長に当然あるのだが、いざ実行力とな